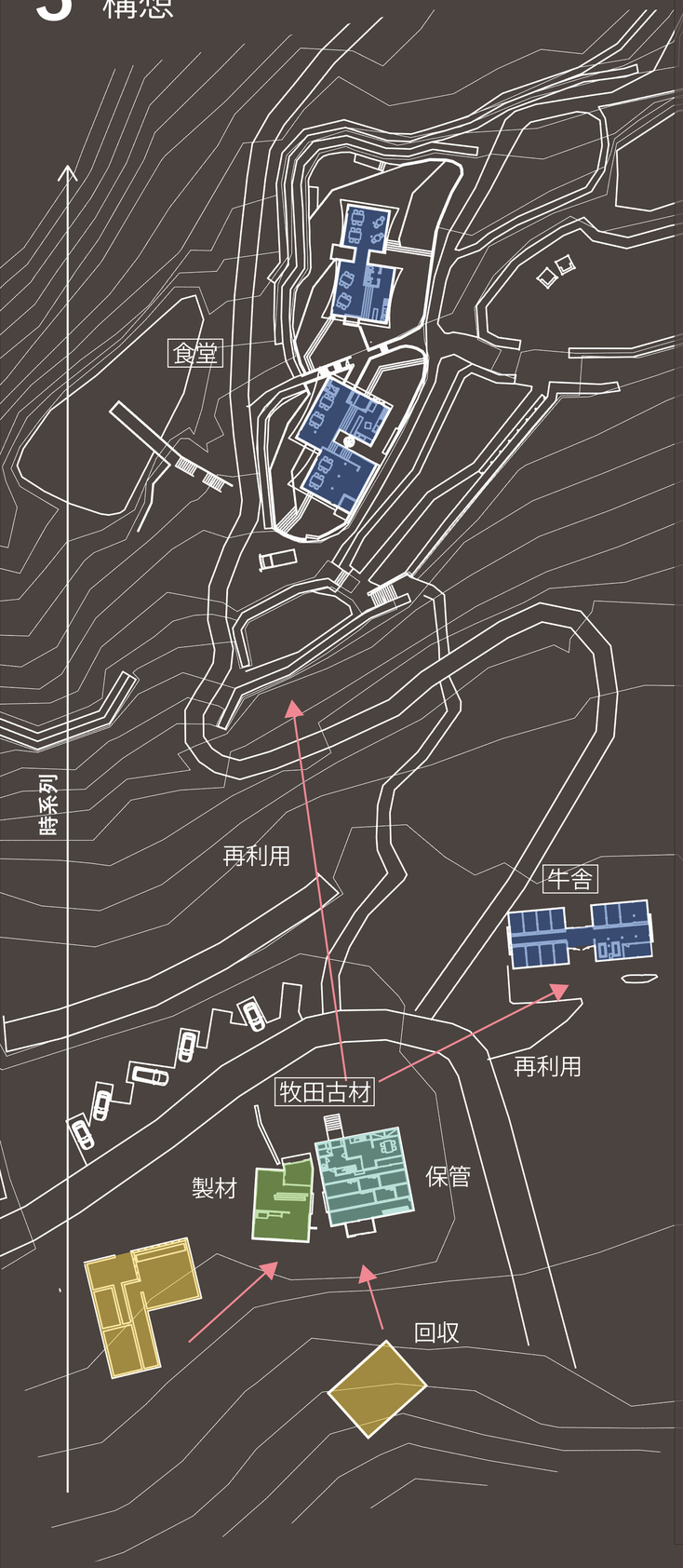
3 構想



設計敷地として十日町峠集落を選んだ理由として、美しい棚田と観光地という大きなポテンシャルがあったことはもちろんのこと、桑井貴志さんをはじめ、区長さん、牧田さんに協力していただいたことで、地域の人の文化を深く知れたことにある。彼らが住んでいた建物には愛着がある。**建物の記憶を残していくための設計提案**を行おうと考えた。

古材の再利用

通常、解体された建物から出た古材は長岡であれば「越後古材」のような古材販売業者に売り渡されるが、この提案では地域単位で古材を回していこうと考えた。誰かの家から出た古材をまた別の誰かの家に使われ、この材はどこの家のこんな場所で使われていたんだなと感じることのできる様に、次に暮らす人に受け継がれるわけである。今でこそ古材流通は全国単位となっているが、古材に対する流通経路は複雑になり、もはやその材がどこで使われ、どんな人がその下で暮らしていたのかも分からないことが多い。峠集落では昔から材の転換が普通に行われてきたことを考えると、**古材の利用を経路が分かる範囲で行う**のは理に適っていた。私の設計では食堂等に古材を再利用しているが、意匠的な側面を持たせつつもここに訪れる観光客、地域住民、とりわけ地域を出て行った人が来訪した際に自分の家の材が新たな軸組として使われていることで、地域への懐古に繋がってほしいと考えた。
牧田家の材が再利用されれば、材の使われ方として事務所→牧田家→食堂という流れとなる。現在室内で使われ、影に隠れた四寸角の材も**三度目の日の目を浴びる。**
食堂には太い新材も用いるが、もし将来的に取り壊すとなったときにまたその材が再利用されることを願う。

棚田の維持

棚田維持の方法も考えた。２０２１年８月、私は上野裕治先生も講演する棚田学会のシンポジウムに参加した。棚田の価値と利用方法を説くものであったが、その講演の中で信州大学の内川義行氏は世界的な人口増と将来的な食糧難を踏まえ、自給率の低い日本ではいずれ棚田での耕作が見直されるであろうと述べた。私はそこまで話を広げるつもりはないが、現状では峠集落の住民も言っていたように棚田での稲作は収益が少なく、景観保全のための存在価値が大きい。しかしながら長い目で見たとき、現在放棄されている棚田も「人々の食糧を確保する目的」で利用される時代が来るのではないかと考えた。それが日本人ではなくともである。私は以前から棚田を放牧地とすることで土地の荒廃を防げるのではないかと考えていたが、シンポジウムでも放牧が棚田管理の一つの手法として挙げられていた。放牧地とすることで棚田の荒地化を防ぐことができ、牧場としての価値も生まれる。これは実際に行っている例として宮崎県在住の参加者が荒れ地となった棚田を牛を放ち、再生させたとして意見を述べていた。棚田の役割としては森林に住む野生動物と人間界との線引きを担っていた側面もある。峠集落でも近年、野生動物が進出しつつあり、人間界との境も曖昧となりつつある。また一軒に一牛舎があったほど牛との関係も深かったことから、提案では放牧地を設定することが適切ではないかと考えた。ちなみに竹所集落では**カール・ベンクス**さんが牛舎の再生を行っている。

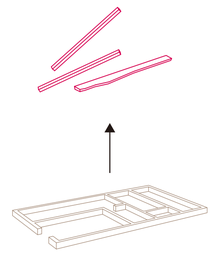
峠集落に三つの建物を提案する意義

峠集落が観光地化されたことで観光客が多く訪れるようになったが、お金を落として貰う場所は少ない。観光客のための駐車場に置かれた寄付箱が頼みの綱である。せっかく棚田で作られたお米も提供できる場所がなかった。現在、桑井さんを中心に宿泊所、カフェなど観光客が滞在する場所の整備が進んでいる。また実際に十日町市から資金を調達し、空き家に対して集落滞在者がワーケーションを行うための計画が進んでいる。そのようなことから法人化された団体を中心にしてプロジェクトを進めていくことになる。設計した全ての建物が同時期に建てられるわけではなく、初めは牧田家の古材保管所が出来上がっているという状態だ。古材保管所、牛舎の方は行政が中心となって整備を進め、古材のプラットフォームとして民間企業との懸け橋になることを目指す。また新たに移住してくる人が古材を使えるよう相談室を設ける。
今回、食堂の提案も行っているが一つのケーススタディとして企業が計画すると設定した。周辺地域にレストランはなくスリーシーズンだけでも全国、海外から多くの観光客が訪れるため食事を提供するメリットは大きいものと思われる。食堂では地元のおばあちゃんたちに雇用を生み出し、目の前に広がる棚田で作ったお米を利用した料理を振舞い、販売所を設けることができるため大変魅力的であろう。
楽観的に考えれば「星峠ブランド」として魅力がさらに高まり、滞在者も増え地域発展に繋がる。未来への投資。
棚田の管理には松代地域でアートフロント率いる「農舞台」が中心となって地域おこし協力隊が棚田の運営を行っているところがあり、峠集落の棚田の管理者も少しずつではあるが増えている。そのようなプロジェクトのひとつとして放牧地を設定することは集落の住民にとっても牛を飼育していた経験もあるため、導入の際の障壁は大きくない。

提案するシステム

牧田古材を中心とした集落内での古材の循環過程。

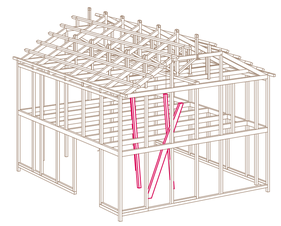
1. 取り出す



解体された建物

峠集落、木和田原集落で解体される建物から木材を購入もしくは寄付してもらう。

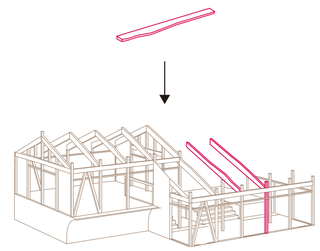
2. 保管



牧田古材

解体された建物から出た古材を牧田古材に集約し、製材、保管する。

3. 再利用



食堂、牛舎等

保管された古材は地域内で新たに新築される建物等に利用される。

空き家の持ち主

住民が自分の家を空き家とする際は、解体の際に出る古材や家具を牧田古材に預ける。

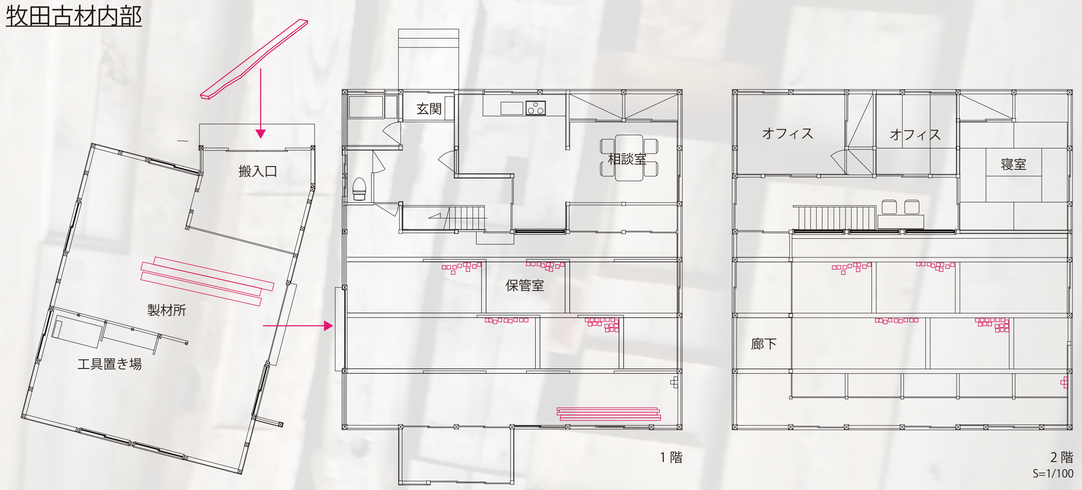
集落の財産

渡った古材や家具は集落の共有物。集落内の住民が使用してもよいし、新規住民も古材を使えるようサポート。

民間のもの

住民のほか、企業が集落内に施設を建てる際に古材を買い取り利用する。一つの建物から出た材が複数の建物に利用されることもある。

牧田古材内部



持続可能なものとは

最近、建物を再利用する方法としてリフォームやリノベーションの提案が盛り上がりを見せている。私は軸組をそのままに内装を変化させる方法とは別に、材を再利用する方法はないかと考えた。どこからか古材を集めてきて意匠的に組み込む方法もあるがそれだと「愛」が薄れてしまう。そのヒントとなるものが峠集落にあった。先に書いたように「脱皮する家」は大工小屋の材を再利用したものであるし、牧田家は事務所の建物を移築し転換したものである。どちらも材の出所が分かっており、かつ空間を大きく変化させている。形に固執せず、でも思い出がある、隣人からの材のおすそ分け、そんな**「ちょうど良い」**提案がしたかった。
今日、集落からは高齢等の理由で地域を出て行ってしまう人が増えている。しかし少なからず地域に住もうと引っ越してくる人もいる。少子高齢化である以上仕方ないが、木和田原集落も含めすべての山村集落が従来のような人口増での活性化は難しいと思われる。しかし住宅を解体し材や家具を保存し、地域としての記憶は残すことができる。峠集落は観光地され地域としての魅力があり、人が訪れることを前提として設計を進めたが、私は住民を見守ってきた古材がそのまま地域に残され、**地域自体が緩やかに終焉へと向かっていく姿も美しいのではないかと考えている。**地域に残された材や家具、棚田には過去の先輩達が培ってきた、その地域での暮らかたのヒントが残され、いずれ訪れるかもしれない移住者にそれを受け継ぐことができる。それが何十年先かは分からないが**目の前の利益を求め提案を行うことは必ずしも相応しくない**と考えた。